

られ、点在する樹木で遠景をぼかすことによって奥行き感を与えていたと解釈される。

(3) 苑内の見通しに関する考察

(1)(2)の結果から、以下の点が推測された(図-16)。

- ・改修計画に当たり、見え方について配慮したと考えられる場所は、宮殿・御休所・分科園・正門・日本庭園入口・御殿・温室・鳥居等が挙げられる。
- ・(1)で明らかとなった造成箇所は主要な視点場であるといえ、特に土地の起伏を利用して苑内の奥行きを強調した場所であるといえる。

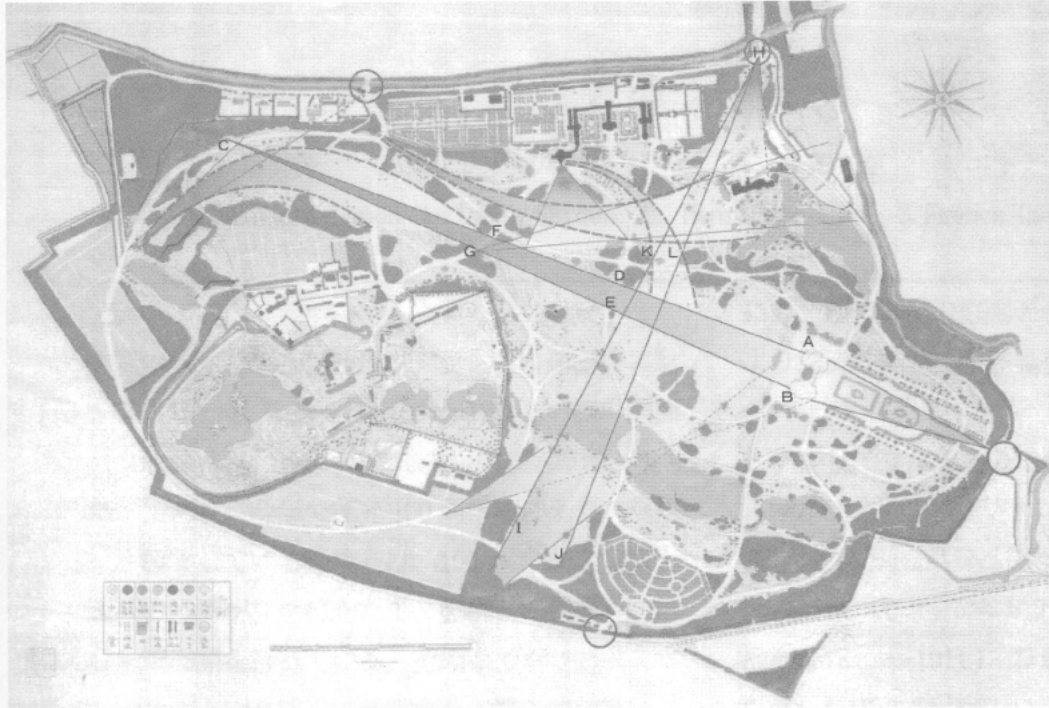


図-15 遠近法の適用箇所

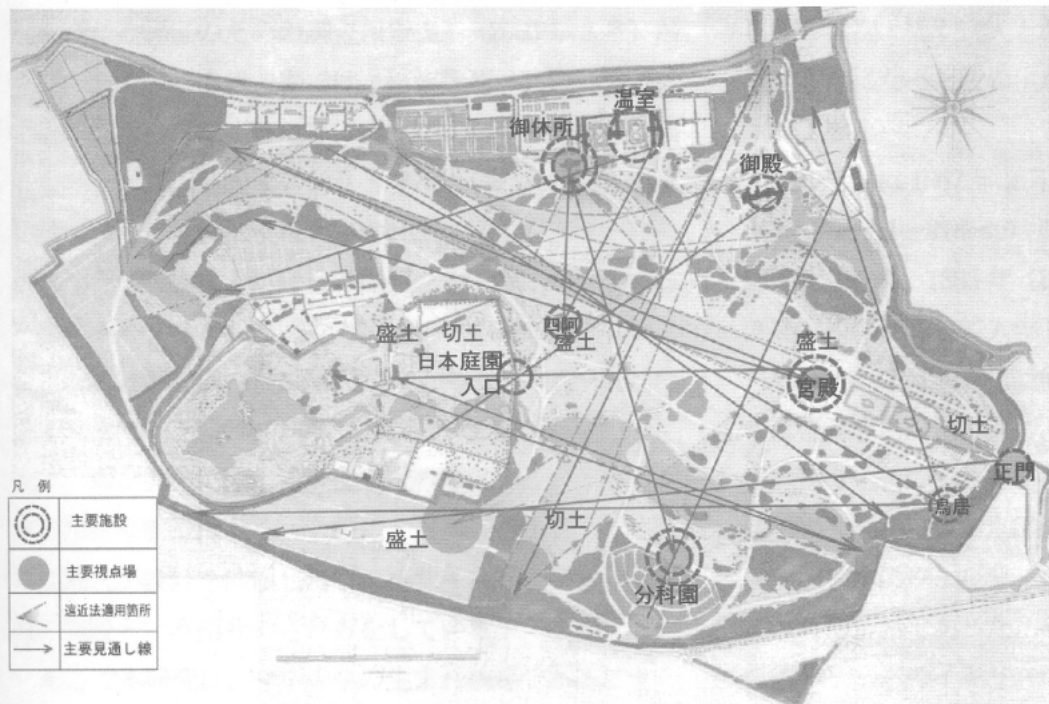


図-16 苑内の見通しのまとめ

5 まとめ

以上の点から、現在の国民公園新宿御苑の原型を形成した明治後期における改修計画の空間構造とデザインの特徴として推測された点は、以下の3点である。

- ・新宿御苑は西洋の「景色庭園」として日本に導入され、その造築に当たっては19世紀フランスの庭園技法や「福羽逸人述園芸論」の「苑圃及び庭園築造上の原則」に基づいて計画された。
- ・全てを自由にデザインするのではなく、既存水系や既存地形を基本的骨格として設計に取り入れていた。

・改修以前までは個別に扱われていた地形・樹木・苑路等を複合的に操作し、苑内に散在する施設・空間の「見え方-見られ方」を緻密に計画することによって苑全体にまとまりや奥行きを与えた最初の試みであった。

今後、新宿御苑を歴史・文化遺産としてより適切に評価・継承するに当たっては、本研究において推測された空間構造やデザインの特徴を考慮しながら、時代に適した保全・利用を行うことが重要であるといえる。

〈注釈〉

- 1) 設計当初、正門付近に宮殿の建設を予定していたが、財政難により建設中止となった。
- 2) 造成による発生土は敷地内で処理されていたと仮定して推測を行った。

〈出典〉

財団法人自然環境研究センター編(2003):新宿御苑「環境の杜」庭園及び植物遺産の評価のための調査報告書:同センター刊